

【石の俗称】

飛鳥の石造物

遠藤 祐二¹⁾・加藤 碩一²⁾

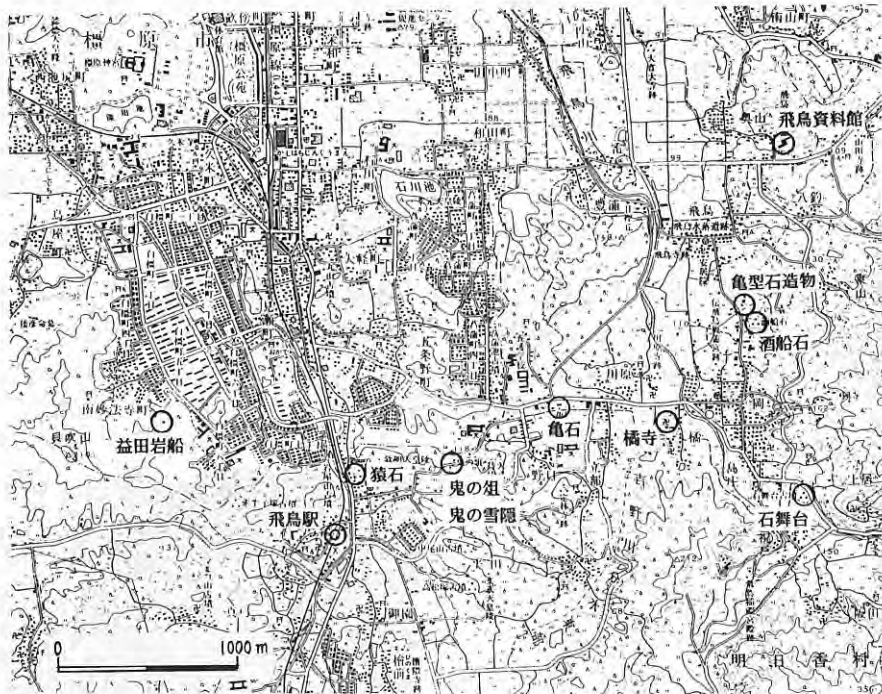
はじめに

日本史における「飛鳥時代」というのは、推古天皇が即位した592年から、694年の持統天皇による藤原京遷都までの約100年間を指します。これに対して、「飛鳥地方」と称する場合の範囲は必ずしも歴史時代にはとらわれず、飛鳥坐(あすかにいます)神社や飛鳥寺を中心とした飛鳥川沿いの小盆地(狭義の飛鳥地域)に加えて、北方にある耳成山・畝傍山・香具山の大和三山に囲まれた地域(藤原京)を含めた広い範囲を採るのが一般的であるようです。現在の行政区画では、奈良県橿原市

南部から高市郡明日香村・高取町に亘ります。

「飛鳥」の字源は「あすか」に掛かる枕詞「飛ぶ鳥の」に由来するといえます。また、明日香・阿須可・阿須可などとも表記されます。

飛鳥地方には数多くの遺跡・遺構があり、歴史的に貴重な地域です。また、「古代ロマンのふるさと」、「ミステリーロマン王国」などとも喧伝され、考古学ファンのみならず一般の観光客にも人気の高い場所でもあります。飛鳥がミステリーの里とされる理由の一つに、多くの謎めいた石造物の存在があげられます。石の求道者(?)を自認する筆者らにとっては、見逃せないフィールドといわなければ



第1図 飛鳥の石造物位置図(国土地理院2万5千分の1地形図「畝傍山」を使用)。

1) 元産総研 地質標本館
2) 産総研 東北センター

キーワード: 飛鳥の石造物, 猿石, 鬼の俎, 鬼の雪隠, 亀石, 橋寺, 二面石, 三光石, 石舞台, 酒船石, 亀型石造物, 石人像, 須弥山石, 益田岩船



写真1 吉備姫王墓の猿石。(左)北側の2体。(右)南側の2体。



写真2 高取城趾の猿石。

なりません。それらを訪ねるルートも様々ですが、今回の飛鳥の石巡りには、近鉄飛鳥駅を出発点に選んでみました。訪れた場所を第1図に示します。

近鉄の電車から降りた飛鳥駅は観光地の駅とは思えないほどに閑静で、駅前に目立つのは飛鳥総合案内所と貸自転車店くらいのもので、案内所では飛鳥の歴史や自然など各種の情報を提供しているほかに、観光スポットを簡潔にまとめた「飛鳥王国」パスポートを発行しています。ここで知識と案内図などを手に入れ、貸自転車を借りて出発です。駅前から東へ高取川と国道169号線を渡り、標識に従って細い道を北へ辿って、まずは猿石を目指します。

1. 猿石

家並みを出外れると、田圃の向こうになだらかな丘が望まれてきます。欽明天皇陵とされる東西に長い前方後円墳です。欽明陵の前方部のさらに西には小さな森があり、吉備姫王(齊明・孝徳天皇の母)の檜隈墓ひのくまとされています。欽明陵と檜隈墓の間の坂を登り詰めて左手の細い段々坂を上ると視界が開け、先ほど渡った国道と近鉄の線路が見下ろせます。ここに猿石があるのですが、この墓域には柵が設けられていて、直接触れることができないのは残念です。

猿石と呼ばれる4体の石像は西を向いて南北に並び(写真1)、北から順に女性・山王権現・法師・男性と通称されています。法師(力士とする説もある)以外の3体には裏面にも顔が彫られているようですが、先に触れた理由で、裏の顔を見ることはできません。もともと猿石は江戸時代(元禄年間)

に欽明天皇陵の南側の田圃から掘り出され、一時欽明陵内に置かれたことがあり、その後現在の地に移されたといえます。

猿石の大きさには違いがありますが、最も大きい山王権現で高さ約1mです。花崗岩の自然石の形を活かして、さほどの手を加えずに造形した様子が見て取れます。しかし、前から漠然と抱いていた疑問が、実物を目の前にして一層強くなりました。これらの石像が猿石と呼ばれるのは何故なのでしょう。山王権現のお使いが猿だということからの発想なのでしょうか。写真に見られるように、どれも猿とは程遠い容貌に思えてなりません。今回は行きませんでした高取城趾(檜隈墓の東南方約5km)にある猿石(写真2)の方が、まだしも猿に似ているといえそうなのですが、

疑問を深めたままの猿石から南へ引き返し、小さな溜池(欽明陵の環濠の名残か?)のほとりを左折、やや急な坂道を登る途中の一息入れたくなるあたりで、鬼の雪隠が右手に現れます。



写真3 鬼の雪隠。



写真4 鬼の俵。



写真5 亀石の全体。

2. 鬼の俵・鬼の雪隠

おにのまいた おにのせっちん

坂道を挟んですぐ右手(南側)にある箱型の石が鬼の雪隠(写真3)、左手斜面の階段路を上った所の平坦地に柵囲いされた板状の石が鬼の俵(写真4)です。俵のある小さな丘は欽明陵の陪塚なのだそうです。元々は俵と雪隠とが組み合わさって横口式石槨(石材で作った棺や副葬品を納める室)をなしていたと考えられています。石槨を覆っていた墳土が流失し、崩落した上部が鬼の雪隠、残った基底部分が鬼の俵というわけです。小径を挟んで上下に対峙する巨石の配置は、この付近に棲む鬼が通りがかりの旅人を捉え、俵で料理して喰らい、雪隠で排泄した、という伝説を生むことになったのでしょう。

鬼の俵はほぼ長方形の花崗岩の一枚岩、雪隠は同じく花崗岩の大石をくり抜いた形になっています。両者を組み合わせた石槨の大きさは、幅1.5m・奥行3m・高さ1.3mほどであったと推定されます。

坂道を北東へ登り切ると左右の開けた台地に出ます。ここから東へ伸びる尾根状の細道を行くことわずか、左手に小山のような亀石の姿が飛び込んできます。

3. 亀石

この亀石は本シリーズの「亀と石」(加藤・遠藤, 2001)の中でチラリと登場しています。その時は写真を掲載できませんでしたので、ここでジックリとその姿を見ていただきます(写真5)。亀石の名

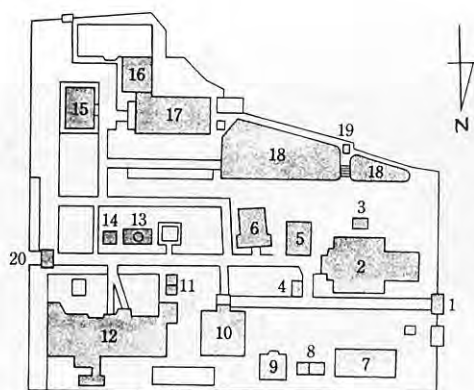


写真6 亀石の表情。

の由来は全体の形もさることながら、下の方に刻まれた頭部の表情が決め手のようです(写真6)。亀とも蛙とも、あるいはETのようにも見える顔はどこかユーモラスでもあり、じっと見つめると何やら不気味にも感じてきます。それもそのはず、亀の頭は今は南を向っていますが、以前には北向き、次には東を向いていた時期があったといえます。つまり北・東・南と回って今の姿があり、いつの日か西を向いた時には大和一円は泥の海と化す、という怖い伝説があるのだそうです。

亀石の底辺は楕円形に近く、長径4.5m・短径2.8m、高さは2mに達する大きな花崗岩塊です。

亀石からさらに東へ細い道を辿ると、やがて拓けた草原に出ます。創建時の橘寺境内とされている場所で、原中に「聖徳皇太子御誕生所」の碑が建っており、そこここに往時の構造物の礎石が点在しています。東の彼方には現在の橘寺の西門一帯が望まれます。



橘寺境内図

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1. 西門 | 11. 三光石・阿字池 |
| 2. 本堂(本尊重文聖徳太子像) | 12. 本坊 |
| 3. 二面石(飛鳥時代の石像物) | 13. 塔跡(五重塔の心礎) |
| 4. 黒駒(太子の愛馬) | 14. 鐘樓 |
| 5. 蓮華塚(欽削塚) | 15. 收藏庫(聖倉殿) |
| 6. 経堂(阿彌陀如来) | 16. 事務所 |
| 7. 慈恩堂・御手洗 | 17. 往生院(天井画) |
| 8. 親鸞上人像・写経塔 | 18. 放生池 |
| 9. 護摩堂(不動明王) | 19. 水神 |
| 10. 観音堂(六臂如意輪観音像) | 20. 東門(正門) |

第2図

橘寺境内図(橘寺
拝観券裏面)。



写真7 橘寺の二面石(左:南面), (右:北面)。



写真8 橘寺の三光石。

4. 二面石と三光石

橘寺は正式には仏頭山上宮皇院菩提寺といいますが、聖徳太子が建立した七ヶ寺の一つ橘樹寺たちばなのきでらが起源とされ、当初は東西870m・南北650mの寺域に66棟の堂舎が建ち並ぶ壮大な規模であったそうです。創建年は明らかではありませんが、7世紀前半のことだったのでしょう。以来、火災などによる消長を繰り返しますが、永正三年(1506年)、多武峰橘寺から東へ約4km)の僧兵の焼き討ちによって壊滅状態に陥りました。現在の姿(第2図)は幕末期の元治元年(1864年)に再建されましたが、東西約100mと往事の規模には及ぶべくもありません。

二面石(写真7)は本堂(太子殿)の南側にあり、高さ1mほどのほぼ直方体に切り出された花崗岩です。狭い方の側面の両側にかなりデフォルメされた人の顔が彫られています。片面は男で対の面は女、また、善と悪とを象徴する表情とも言い伝えられています。実際に見たところでは、どちらがいづれを表すのか定かではありませんでした。

聖徳太子がこの地で教典の講讃を行った際に、太子の冠から日月星の光が輝くなど、いくつもの奇

瑞が現れたといわれています。その光が凝集したといわれるのが三光石(写真8)で、小さな池の縁に建っています。高さ1mほどの硬質砂岩と思われる、自然石そのままであるのと花崗岩でないこととで、他に見られる飛鳥の石造物とは一線を画す存在です。

橘寺を出て坂道を北へ下ると、車の行き交う広い道に突き当たります。右折して間もなく飛鳥川にかかる橋を渡ってさらに右へ、道を東南にとって飛鳥の石造物中の白眉とされる石舞台へと向かいます。

5. 石舞台

島庄の集落から東へ坂道を上ってほどなく、右手に広がる台地状の公園一帯が目差す石舞台古墳の場所です。飛鳥観光のメッカともいうべき石舞台の偉容は、遠目にも見る者を圧倒する迫力に満ちています(写真9)。ここの古墳は古くから墳丘の土が取り去られ、石室の天井石が水田の中に露出し



写真9 石舞台の遠望。



写真10 石舞台。写真9の反対側。写真左手に玄室へ降りる道がある。

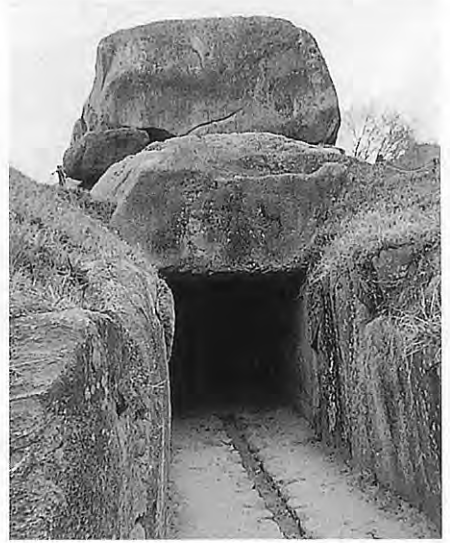


写真11 石舞台玄室への開口部。



写真12 酒船石(部分)。

ていたといいます。本格的な発掘調査は1993年に始まり、次第にその全貌が明らかにされてきました。蘇我馬子の墓とも伝えられる石舞台古墳は、東西約55m・南北約52mのほぼ方形で、周囲は約8m幅の濠と底辺幅約10mの外堤で囲まれています。中央の石室は巨大な花崗岩を積み上げた天井部分が整地面上にあり(写真10)、横穴式の玄室へは5mほど下に掘り出された羨道せんどうを通して内部にまで立ち入ることができます(写真11)。割石の敷かれた羨道中央の溝は、玄室の壁面沿いに巡らされた溝からの水を集める排水溝です。

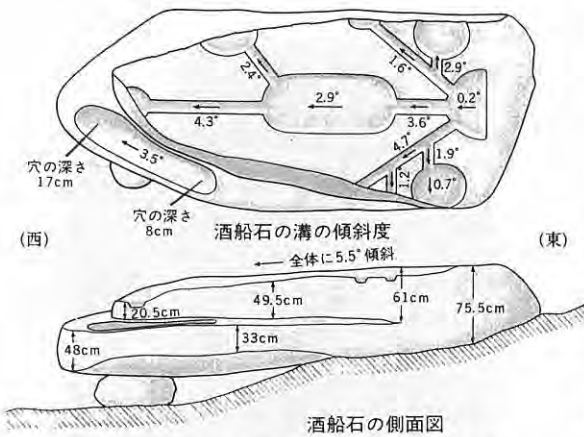
石室の規模は全長20.5m、玄室の長さ7.7m・幅3.4m・高さ4.8m、羨道の長さ11.5mと測定されており、最大の天井石は約77tと推定されています。

石舞台を下りて島庄まで引き返し、今度は道を北にとって飛鳥集落の方へ向かいます。明日香村役場が置かれている岡集落の家並みがまばらになる頃、右手に天理教岡教会の建物が見えてきます。酒船石への標識に導かれて教会北側の小道を東へ50mほど入り、左手の段々道を30段ばかり上ら

た岡の中腹に、竹林に包まれて酒船石はひっそりと鎮座していました。

6. 酒船石さかふねいし

数ある飛鳥の石造物の中にあつて、古くから謎の石として最も多くの注目を集めていたのが酒船石でした。その訳は表面に刻まれている謎めいた模様にあります(写真12)。平滑に成形された面上には大小の円い窪みとそれらを結ぶ溝が彫られ、その目的・用途についての推論が戦わされてきたのです。曰く、酒造器説・灯油製造器説・鉱石(砂金または辰砂)採取器説などなど。しかし最近では、飛鳥の地には水の庭園文化が栄えたことを示唆する遺跡が相次いで発掘されるようになり、酒船石も



第3図 酒船石詳細図(松本清張「火の路」より)。



写真13 亀型石造物の出土した一帯(吉田・渡辺, 2002)。

また導水施設の一部ではないかとする説が有力視されているようです。

長さ約5.5m、幅約2.3m、高さ約1mの花崗岩で、側面には何のために元々の石を割り採った痕が楔穴の列として残されています。

酒船石の写真を撮っていて、松本清張の「火の路」の冒頭部分を思い出しました。雑誌社の編集者と写真家が村役場の観光主任の案内で酒船石を撮影しているところに、主人公の女性が登場する場面です。社会派推理小説で一世を風靡した松本清張は古代史にも造詣が深く、邪馬台国論争にも一石を投ずるなど、独自の歴史的考察を組み込んだ多くの著作があることでも知られています。「火の路」の中でも主人公(大学の史学科の助手)の口を借りて、猿石・亀石・酒船石など謎の石造物の由来を清張流に推考する過程が、読みどころの一つになっています。酒船石の詳細な図面も挿入されていますので、借用させていただきました(第3図)。上下2冊、合わせて800余ページに及ぶ大作ですが、読み始めると止まらなくなること請け合いです。

元の道へ戻って、酒船石があった岡の麓を北に進むとすぐに、道を横切る谷間に出会います。亀型石造物を中心とする水の庭園とされる遺跡はごく最近、道路東側の谷底部分から発掘されました。

7. 亀型石造物

かめがたせきぞうぶつ

斉明天皇(在位655-661年)の時代に造られたと

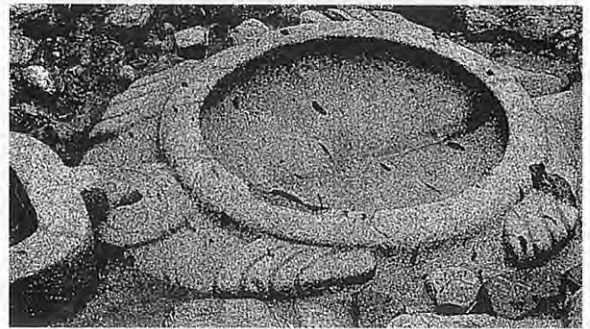


写真14 亀型石造物(吉田・渡辺, 2002)。

推定されている亀型石造物が現れたのは2000年のこと、1300年余りに及ぶ永い眠りから目覚めたこととなります。発掘場所一帯は遊歩道に囲まれて、割石を敷き詰めた遺跡全体を見下ろせるようになっています(写真13)。敷石の中央に見える丸い部分が亀型石造物で、その奥の四角い水槽から亀型に向かって水の流れるように配置された施設だったと解釈されています。詳しくは「亀と石」(前出)の中に述べていますので、そちらを参照して下さい。また、日本経済新聞の「美の美」欄にも取り上げられました(吉田・渡辺, 2002)ので、印象に新しい読者も多いことでしょう。亀型の見事な写真も掲載されています(写真14)。

亀型石造物からさらに北へ、飛鳥集落手前の飛鳥寺や飛鳥坐神社に立ち寄った後、集落の北東およそ1kmにある奈良国立文化財研究所飛鳥資料館を訪ねます。



写真15
石人像。



写真17 益田岩船。



写真16
須弥山石。

8. 石人像と須弥山石

飛鳥資料館に置かれている石人像と須弥山石は、飛鳥寺の北約300mに位置する石神遺跡から明治時代に掘り出されたものです。本物は館内に所蔵されていますが、精巧なレプリカが同館の庭園に展示されています。

石人像は腰掛けた男女の寄り添う姿がひとつの石柱に彫られており、どこか安曇野に代表される道祖神と似通った印象を与えます(写真15)。この像の大きな特徴は男子像の足の下から細い穴が開けられ、内部で枝分かれして男が持つ杯と女の口とへ通じていることです。つまり石人像は巧みな細工を内蔵した噴水施設というわけで、写真に見られるように水を噴き上げる様子が再現されています。

須弥山石は表面に山並みと水波模様の刻まれた

三段組の円柱に半卵形の頂部を載せた形をしています(写真16)。須弥山とは古代インドの宇宙想像説で世界の中心にあるとする高山のことで、山の下には地輪・水輪・風輪が重なり、麓には九山八海が広がっているとされています。須弥山石の石組みはそのような世界を象徴したもののなのでしょう。こちらも頂上から水を噴き出す噴水施設になっています。

資料館に着く頃から空模様が怪しくなりましたが、とうとう降り出した雨の中を一路西へ、飛鳥の集落をすっ飛ばして檀原神宮前駅の方角へ急ぎます。駅の手前で出会う国道169号を左折、岡寺駅の北側で近鉄を横切って南西へ、目指すは益田岩船です。

9. 益田岩船

南妙法寺町の新興住宅地を抜けると、貝吹山から東へ伸びる稜線の麓に益田岩船への登り口の標識が立っています。ここから急斜面を登ること約5分、目の前に岩船の巨体がのしかかるように迫ってきます(写真17)。

益田岩船は東西11m・南北8mに達する花崗岩の巨石で、斜面に埋もれているため地表からの高さは方向によって異なり、北東側が最も高く優に5mはありそうです。最も低い南西側(それでも2m半はある)から石を抱くようにして登った岩船の頂部は平坦で、東西に横断する1.6m幅の溝が切られています。溝の中央1.4mを挟んだ左右に、溝幅と

同じ1.6m四方の穴が掘られ、深さは1.3mあります。上面の溝は同じ幅で東西の側面にも続いています。

岩船の用途についても石碑の台座、火葬墓、占星台などの諸説が出されているようですが、どれも決め手に乏しく、益田岩船もまた謎に包まれた存在なのです。

益田岩船を最後に飛鳥駅へ戻り、今回の石巡りを終えました。途中で雨に降られて、飛鳥集落近くの河原にあったはずの「弥勒石」を見逃してしまったことが悔やまれます。とはいえ、飛鳥南方の高取町には「人頭石」・「マラ石」などの存在も知られていることですし、また何時の日にか訪れる機会もあることでしょう。

飛鳥の石造物に使われた花崗岩は、奈良盆地周

辺に分布する白亜紀花崗岩類(領家深成岩類)とされていること、及び「奈良県下の歴史散歩」(文献欄参照)を全体のガイドとさせていただいたことを書き添えて、本稿の締めといたします。

文 献

加藤碩一・遠藤祐二(2001): 亀と石. 地質ニュース, no.563, 61-69.
 奈良県歴史学会編(1993): 奈良県下の歴史散歩・下. 山川出版, 294p.
 松本清張(1978): 火の路(上・下). 文春文庫, ま1-29・30. 文芸春秋社. <朝日新聞連載小説「火の回廊」(1973-74)を改題・単行本化(1975)>.
 吉田俊宏・渡辺信雄(2002): 美の美「飛鳥の情景」(上・中). 日本経済新聞, 11月17・24日付.

ENDO Yuji and KATO Hirokazu (2003): Ancient manufacturing stones in Asuka area.

<受付: 2003年8月28日>